

# 宮塔・樓塔・廊院

## ——中国仏教寺院三様式の変遷——

●●●●●

張 弓

中国の仏教寺院は歴史的に、宮塔式、廊塔式、廊院式の三様式を経てきた。この三様式は交錯しつつ変遷を重ね、後漢から唐代に至る千年近くの間完成をみた。中国仏教寺院の三様式の変遷は、中国建筑の伝統が天竺伽藍様式を参考にしつつこれを改造し、新たな様式の中国仏教寺院を創り出していく過程、すなわち中国とインドの融合、インド様式の中国化の過程であった。唐代に廊院式様式が確立した後、中国各地に伝わり今日に至っている。宋以降の仏教寺院の構造にはなお変化が見られるものの、全体の様式は変わっておらず、廊院式の基本的構造を脱していない。

唐代に築かれた無数の仏教寺院は、時代の変転、天災・人災による破壊のため、今ではもはや元の姿を見ることはできない。見ることができるのは、いくつもの宮塔、廊塔

の遺跡、もしくは磚塔の名残である。唐朝建中三年（七八二年）に建てられた五台山南禅寺正殿（図1）、大中十一年（八五七年）に建てられた五台山仏光寺東大殿（図2）は、わずかに残った貴重な遺跡として、古い建物がその姿をとどめている。中国仏教寺院の様式変遷の軌跡を考察するには、今となつては文献の記載、仏教寺院の遺跡、敦煌壁画に描かれている寺の姿をよりどころにするほかに、この三者を互いに参照しつつ、考証を行った。

### 宮塔式仏教寺院

魏の時代には漢人が出家して僧になることは禁じられており、中国にやって来た外国の僧が首都や大きな都市に寺

を築くことが許されているだけだった。<sup>1)</sup> このことは中国に現れた初期の仏教寺院が、天竺西域の僧が熟知していた様式であったことを意味する。こうした様式は後漢時代には塔を作る法式とされ、洛陽の白馬寺の壁に描かれている。

『魏書・釈老志』には、次のように記載されている。

洛中白馬寺を構えてより、仏図を盛んに飾り、画跡甚だ妙にして、四方式と為す。宮塔制度は凡て、猶ほ天竺の旧状に依りて之を重構するがごとし。一級従り三、五、七、九に至る。世人相承し、之を「浮図」と謂い、或いは「仏図」と云う。

白馬寺の主体建築である「仏図」は、奇数層に築かれているが、これは天竺三宮塔式の特徴である。仏図の各層壁面には仏龕がたくさん設けられており、「天宮千仏」を象徴しているところから、「宮塔」とも呼ばれている。天竺宮塔については、玄奘の『大唐西域記』によれば、釈迦が悟りを開いた地である菩提伽耶 (Bodhi Gaya、現在インドのビハール邦 Gaya 城南約一〇 km) に、「菩提樹伽藍」または「菩提樹垣」があり、阿育王が建てたものと伝えられている。この宮塔は今でも残っており、高さ約五〇 m、台座の平面は「四方式」で、一辺一五 m である。塔身は七層あり、上にいくほど小さくなり、矩柱形を呈している。各層の四面に、仏龕がびっしりと作り付けられている。また釈迦が初めて説教をした鹿野苑 (Migadaya、現在インドのベナレス

の西北約七 km) には、「鹿野伽藍」がある。玄奘はこれを次のように描いている。

区界八分、垣を連ねて周堵す。軒を層し閣を重ね、麗しきこと限りなし。……大垣中に精舎有り、高さ二百余尺、上に黄金を以て隠起し、庵没羅果を作る。石を基階と為し、磚を層龕に作る。龕は四周幣(匝)りて、節級百數、皆黄金佛像の隠起するあり。<sup>3)</sup>

七世紀初めに玄奘が目にした鹿野精舎は、石構が基座を築き、磚の塔身を持ち、龕を重ねること数百、内部に仏像があつた。また頂部はマンゴー(庵没羅果)形になっており、精舎の外側には周苑があつた。これは典型的な宮塔式構造である。後漢の洛陽白馬寺の壁に描かれている四方式宮塔は、この二つの天竺伽藍の建築様式と明らかな淵源関係がある。

魏晋時代のパミール以東の西域地区の仏教寺院には、宮塔式が広く用いられた。イギリスの探検家スタイン (Sir Aurel Stein) は、一九〇六年には現在の新疆若羌の東北(すなわち鄯善の伊循)のミールン地方で数か所の古寺遺跡を発見した。<sup>4)</sup> 西暦三、四世紀の塔式仏教寺院群である。うち一か所は大型寺院(図3、4)で、四角形の基座に、円柱形の塔身を有している。スタインは塔身の壁に「壁龕に嵌め込まれた人身とほぼ同じ大きさの彫像の跡」を見つけた。基座の周囲には健陀羅式の立柱で区切られた柱龕の中に、



图1 五台山南禅寺正殿



图2 五台山仏光寺東大殿

「跌坐した頭のない大きな座像が六体並んでいた」、「膝より上の高さは約七フィート強だった」。基座の周囲の通路には座像の大仏頭があった。この宮塔の層龕の中の仏像は「人身とほぼ同じ大きさ」で、柱龕の中の座仏像は高さ約二・五mであった。この宮塔がいかに高かったかが分かる。

東晋の隆安五年(四〇一年)、法顕は法を求めて西方に赴き、于闐国に至ったが、そこで同国の大僧伽藍一四か所を見た。そのうち王新寺については、次のように記されている。

作り来たりて八十年、三王を経てようやく成る。高さ二十五丈、彫文刻鏤、金銀の其の上を覆い、衆宝合わせ成るべし。塔後に仏堂を作る。莊嚴にして妙好なり。梁柱戸扇窓牖、皆金を以て薄(箔)す。別に僧房を作る。亦た嚴麗整飾にして、言尽くる可きに非ず。

この寺院の主体は大きな宝塔(宮塔)である。塔の後ろには仏堂があり、周囲に僧房があつて、華麗な裝飾が施され、端正に配置されているというのである。

亀茲国の仏教寺院もまた宮塔式が盛んであつた。『晋書』には亀茲について「其の城は三重にして、中に仏塔廟千所有り」と記されている。うち雀離大寺、阿奢理貳大寺が最も名高い。この二つの寺の発掘によって明らかになつたところでは、いずれも宮塔式寺院である。雀離寺遺跡は皮朗古城の北に位置し、大塔基跡を中心に、仏殿、僧房が配されていた(図5)。阿奢理貳寺は現在の庫車県西北の確爾山

南麓蘇巴什古城台地にあつた。同寺は二つの塔が向かい合っているのが特徴である。東南側の仏塔の基座は「四方式」で、一方にアーチ扉が開いている。塔身は円柱形で、ほぼ塔基と同じ高さである。全体に仏龕がぎっしりはめ込まれている(図6-1)。西北側の仏塔は基座、塔身とも四角形で、大体同じ高さである。基座の一方にアーチ扉が開いている。扉の傍らには鍵陀羅式の龕柱がある。塔体は下から上にかけて著しく小さくなり、矩形形を呈している。塔前の一段の残壁は堀だつたらしい。壁の外側は崖に面している(図6-2)。二つの塔の回りの層龕と柱龕には右に向かつて礼拝するために仏が安置され、ミールン塔寺の機能と似ている。炭素14による年代測定によると、東寺は今から一七八〇年ほど前(年輪で校正すると一七三〇年ほど前)、すなわち西暦二〇〇年から二三〇年にかけて建てられたもので、漢の獻帝から魏の明帝にかけての時期に相当する。西寺の方は今から一五七〇年ほど前(年輪校正によれば一五〇五年ほど前)、すなわち西暦四一〇年から四七五年にかけてのもので、西涼の初期から魏の孝文帝にかけての時期に相当する。

晋代の高昌県(現在のトルファン)に、西克普(Sirkip)古寺があつた。建造時期は不明だが、やはり宮塔式仏教寺院である。今世紀初頭にスタインが撮影した写真で見ると(図7)、塔は磚構造で、平面「四方式」である。基座の四



図3 鄯善・ミーラン古塔寺遺跡遠望

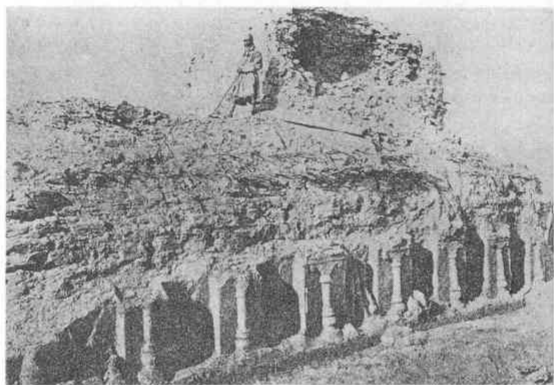


図4 鄯善・ミーラン古塔寺遺跡遠望



図5 雀理寺遺跡

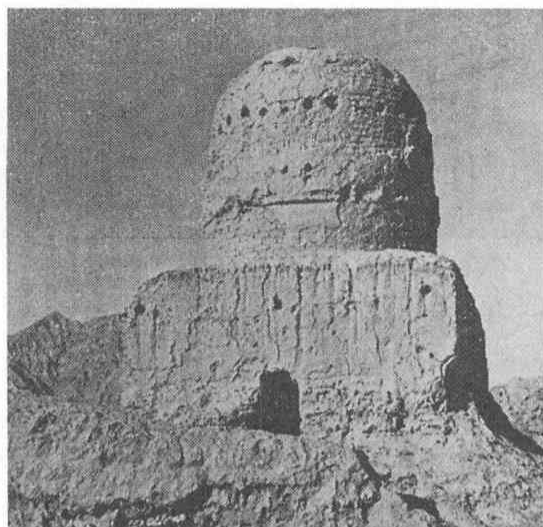


图6-1 阿奢理貳寺·蘇巴什東塔

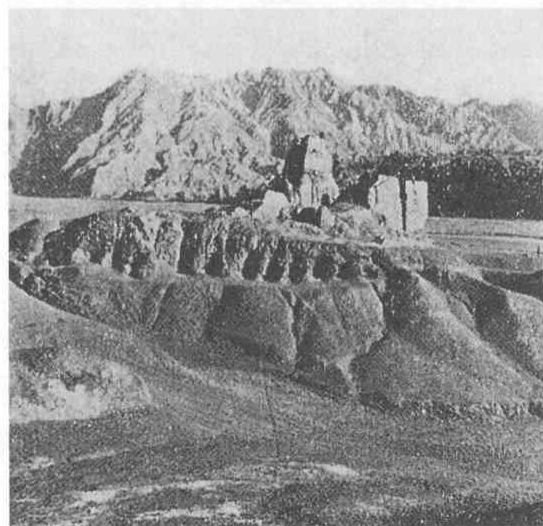


图6-2 阿奢理貳寺·蘇巴什西塔

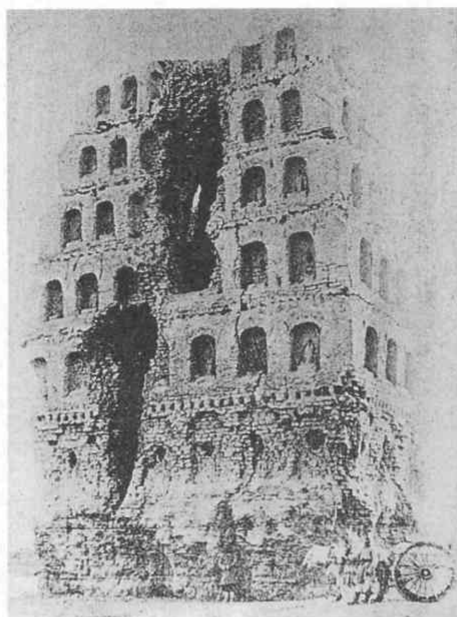


図7 トルファン・西克普古塔寺

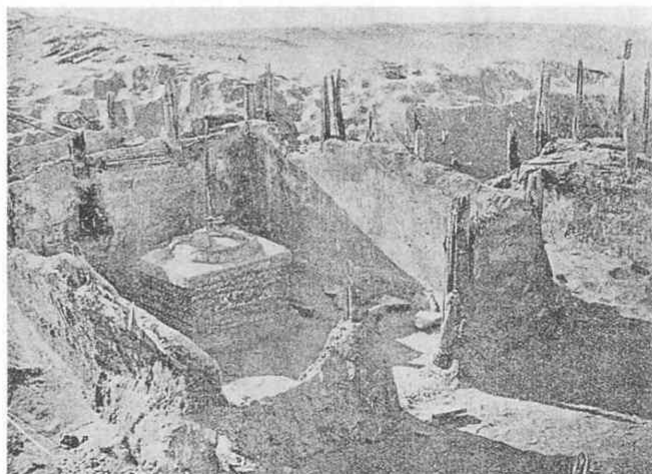


図8 丹丹烏里克小寺遺跡

面に柱龕があり、龕の高さ約二m、うち一面は六つの龕に区切られている。これはミールン大寺塔基正面の柱龕の数と同じであるが、規模がやや小さい。方形塔基は六層残存している。塔壁には仏龕がぎっしりとはめ込まれている。うち一面は各層に六龕ずつあり、中には仏の座像が安置されている。この寺の塔の様式は鹿野苑伽藍宮塔の「磚を層龕に作る」の古い様式と同じである。

唐代の安西地区では、寺院精舎はやはり仏塔が主体であった。道宣の『釈迦方志』には唐初の屈支国（すなわち龜茲）について「王城民宅、像塔を樹てること多く、書き尽くせず」とある。和闐の東北丹丹烏里克に唐代の小さな寺の遺跡がある（図8）。スタインはその構造を次のように描写している。「小さな四角い建物で、四方を距離の等しい垣根が囲んでいる」。四角い建物の中央には四角い基座があり、「以前は上に大きな仏像が立っていた。仏像の足部は今も残っている」。基座の周囲には「四角形の通路がある。これは迂回用である」。この四角い寺は宮塔式寺院のミニチュア版でありバリエーションであるようだ。本来露天にそびえ立つ宮塔が小室の中央に屹立している。基座の上の「千層仏龕」が仏の立像の代わりをしている。塔の外側にめぐらされていた通路が、室内の回廊に変わっている。炭素14測定によると、この小さな寺の建立年代は唐代中葉に属する。

西晋永康二年（三〇一年）に張軌が涼州刺史の任に就い

た後、西域の宮塔様式が敦煌等の郡に伝わった。『魏書・積老志』によれば、

涼州は張軌より後、世に仏教を信ず。敦煌の地は西域に接し、道俗（道も俗も）交も其の旧式を得て、村塢相属し、塔寺有ること多し。

「旧式」「塔寺」とは宮塔様式を指し、「道俗交も得る」とは寺院も民間の精舎も宮塔式を採ったことを指す。敦煌郡は涼州の西端にあり、西域と境を接しているから、必然的に西域の「旧式」がまず達する地であった。この記述は涼州で仏教が盛んになり始めたことを物語るだけでなく、宮塔様式が西域から東へやって来た経路を示している。

唐代には、宮塔式仏教寺院の分布地域は、基本的には現在の新疆地区に限られており、敦煌がその東の境界であった。

### 楼塔式仏教寺院

天竺磚石構造の宮塔様式が中国に入り、中国の伝統建築の木石（磚）構造と結合して、次第に中国の建築伝統に近づき、仏塔の様式・構造面の変化を引き起こした。そして仏教の信仰様式の変化によってもたらされた仏塔の機能の変化が、仏塔様式の変化の方向をさらに決定づけた。こうして楼塔が出現したのである。



## (一) 北方の樓塔

漢末に竇融が徐州に建てた浮屠寺<sup>(4)</sup>は、宮塔式が内地に伝わった後に変化が生じた初期の実例である。『後漢書』はその様式を、次のように記している。

上に金盤を累ね、下は重樓と為す。又た堂閣周回し、三千許<sup>(5)</sup>の人を容るること可なり。

『三國志』にも次のような記載がある。

銅盤を九重に垂れ、下は重樓閣道と為し、三千余人を容るること可なり。

いずれもわずか十数文字で、寺全体の配置とともに、主体建築（「重樓」）と補助建築（「堂閣」）の特徴・規模をそれぞれ説明している。この浮屠寺は、雄大な「重樓」を中心に、広々とした「堂閣」をめぐらし、互いに「閣道」で繋がっている。寺の主体建築は、正確に言えば「重樓」と「銅盤九重」の結合である。「九重銅盤」とはすなわち「相輪」である。これは外観からいえば樓閣で、性格からいえば仏塔である。したがってこの建築物は「塔」であって伝統的な「闕樓」ではないと見なされる。伝統的な樓閣の外観を持っているがゆえに、これを「樓塔」と呼ぶのである。河南省洛寧故県第四号東漢墓で出土した陶樓塔は、磚木構造を体现して、五層、扉があり、宝瓶が頂きについており、天竺宮塔式が中国の樓閣式と融合し、仏教寺院樓塔に変わっ

ていった軌跡をあざやかに示している（図9）。『漢法本内伝』に記載されているところによれば、魏の明帝（在位二二九―二三九年）の時、洛陽宮の西に寺があり、

刹頭に幡を繫ぐ毎に、ややもすれば宮内を斥<sup>き</sup>り見る。

帝之を患い、毀ちて除かんとす。時に外国沙門寺に居し、乃ち金盤を齎<sup>もたら</sup>して水を盛り以て舍利を貯す。

宝刹作頂、金盤盛水といった記述から、この寺院の主体建築はやはり樓塔であることが分かる。

重樓、堂閣、閣道、これらは漢代以来の伝統的建築様式である。相輪は仏教建築の目印である。この二つの建築要素が融合した樓塔式寺院は、中国と天竺の二つの建築の伝統が結びついて生まれたものであり、これが中国における仏教寺院の初期建築の様式となつて、同時期のパミール以東諸国の仏教寺院の宮塔式様式の範型と、互いに精彩を放つたのである。

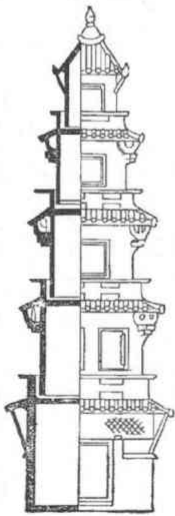


図9 後漢陶樓塔

樓塔式寺院の出現は、中国仏教の発展及び功德行為の変  
化とも関係がある。樓塔が宮塔と違う点の一つは、樓塔の  
中に仏像を置き、塔外の千層仏龕がなくなっているという  
ことである。この重大な変化は、中国の寺院で誦經によつ  
て功德を積むことが盛んになったことと関係する。これが  
西域式の塔に詣でる功德に取って代わったのである。徐州  
寺の環塔堂閣を、三千人の信徒が「課誦仏經」することが  
できるようにしたのも、まさにこの新たな信仰行為の必要  
に対応するためである。梵宮諸仏が狭苦しい雲中の層龕か  
ら下りて、雄大で広々とした堂殿に入ったのである。樓塔  
式はそれ以降仏教寺院様式の主流となり、宮塔式精舎に取  
って代わった。インド様式と融合し、インド式を中国式に変  
えたのである。徐州浮屠寺はその初期建築の結晶として、  
中国木石（磚）伝統の構造転換における弾力性を示し、歴  
史書に見られる中国樓塔の最初の寺であるということがで  
きる。鎌田茂雄氏はこれを中国における寺院建築の始まり  
であるとす。この寺の樓塔は、相輪が高く聳え、規模が  
雄大で、構造が複雑であり、新様式は相当に成熟している。  
二つの伝統の融合は、その前にすでに一定の発展過程を経  
ているはずである。江南で出土した魂瓶に描かれている樓  
塔（後述）から、初期樓塔の面影を想像することができ  
る。

前涼時代、張天錫が姑臧（現在の甘肅省武威）に宏藏寺  
を建てた。「七層の木浮図有り」、「高さ一百八十尺、層は周

圍二十八間を列べ、面は四戸八窗を列べ、一一相似たり」。  
おそらくこれが史書に記載されている中国最西端の樓塔式  
仏教寺院である。同じく前涼の地域に属しながら、敦煌の  
仏教寺院では宮塔式が盛んに行われたのに対し、姑臧には  
樓塔式が出現したのである。寺塔様式の変化は、西域と漢  
の地における二つの功德形式、すなわち塔詣でと礼仏誦經  
が、おそらくは敦煌と姑臧をその境界線としていたことを  
意味している。

北魏の仏教寺院の構造もまた、徐州浮屠寺の樓塔式を踏  
襲したものである。北魏天興元年（三九八年）、塔式仏教寺  
院が初めて平城に現われた。『魏書・釈老志』には、次のよ  
うに記されている。

是の歲に、始めて五級仏図、耆闍山及び須弥山殿を  
作り、加うるに絵で以て飾る。別に講堂、禪堂、沙門  
座を構える。

この寺は主体建築が五級仏図であるところから、「五級大  
寺」とも呼ばれた。寺内の聖殿、講堂、禪堂、沙門座等の  
建物は、仏像を安置したり、僧俗の読經や誦禪に対応した  
りするためである。その建築機能は徐州浮屠寺と同一タイ  
プに属するから、やはり樓塔式である。北魏皇興二年（四  
六八年）、献文帝拓跋弘は平城に永寧寺を興した。「七級浮  
図を構え、高さ三百余尺、基架博敞として、天下第一と  
為す」。「基架博敞」にして、浮図が高く聳えるというのは、

まさに木構楼塔の特徴である。磚石構造の宮塔の「層龜千仏」は、「博敞」である必要もないしそのすべもなかった。

『釈老志』に記されているところでは、「太延（四三五―四三九）年間、涼州を平らげ、其の国人を京邑に移し、沙門仏事皆俱に東にうつる」。北魏の仏教は前涼から伝わったのであるから、平城永寧寺は姑臧宏藏寺の構造様式と同じく、仏像の安置、読経、課誦の必要に対応するためであることは疑いのないものである。

熙平元年（五一六年）、靈太后が洛陽に新たに永寧寺（5）を築いたが、やはり楼塔が中心であった。『洛陽伽藍記』にはその構造配置について次のように記載されている。

中に九層の浮屠一所あり、架木これを為し、高さ九十丈を挙ぐ。刹有り復た高さ十丈、合わせて地を去ること一千尺。京師を去ること百里にして、すでに遙かに之を見る。……刹上に金の宝瓶有り、二十五石を容る。宝瓶の下に承露金盤、三十重有り、周りに匝（わ）らずに皆金鐸を垂らす。……浮図に四面有り、面に三戸六窗有り、戸は皆朱漆す。……浮図の北には仏殿一所有り、形は太極殿の如し。……僧房楼観一千余間、……寺院の牆には皆短椽を施し、瓦を以て之を覆い、今宮の牆の若き也。四面に各一門を開く。南門楼は三重にして、三閤道を通じ、地を去ること二十丈、形を制するは端門に似たり。……東西両門、亦皆之の如し。異

とす可き所は、

唯だ楼の二重のみ。北門一道は

屋を施さず、鳥

頭門に似たり。

近年洛陽永寧寺楼

塔の基座跡が発掘され、明らかに

たところでは、楼塔は

「地面より五mほど

高い土台」の上に築

かれ、「基座は方形を

呈し、上下二層があ

る」。下層は「東西の

長さ約一〇一m、南

北の幅約九八m（図

10）である。一万m

の基座の上に築かれ

た、高さ一四七mに

達する永寧寺木塔

は、かつては中国で

最も高い古塔であつ

た。雲の上に聳える



図10 北魏洛陽永寧寺楼塔基座跡

その姿の壮観さは、当時「都より百里離れたところから遙かに見える」というのもむべなるかなと思われる。『洛陽伽藍記』にはさらに、瑤光寺は五層の仏塔を主体とし、ほかに講殿、尼房五百間があつて、「綺疏連亘として、戸牖相通」じたことを記している。また胡統寺について「宝刹は五重にして、金刹高く聳ゆ」、「洞房交も匝らし、戸に對して窓を交う」、秦太上君寺について「五層浮図一所、修利して雲に入る」、「誦室、禪室、周流重疊」と述べている。樓塔、仏殿を主体とし、講殿、堂室、僧房をこれに配するというのが、これらの仏教寺院の構造配置の基本的特徴であつた。洛陽諸寺は木石（磚）構造の配置と単体建築造形の面における長所を體現しており、中古時代の樓塔式仏教寺院の代表的な一群となつた。

北魏の晋陽にあつた三層の樓塔を主体とする三級寺は、朱兆が孝庄帝をこの寺で殺したことで知られている。隋の初期、河東の釈宝澄は、普救寺に百丈の大像を建立した。「象は三層を設け、岩は四合を廊りて、上坊下院たり」、やはり中に仏像を置く三層樓を主体としていた。

## (二) 南方の樓塔

江南地区では、樓塔寺院は遅くとも三国時代にはすでに現れていた。康僧会はコーチシナから建業に来て教えを広めた。孫権は「即ち為めに塔を建て、以て始めて仏寺有り、

故に建初寺と号す。因りて其の地を名づけ仏陀里と為す」。建初寺は江南第一寺と呼ばれた。この記載から明らかによろに、建初寺の主体はやはり仏塔である。また別の記載では、寺の中に康僧会本人が「携えて来た西国の仏画」が祭られていたが、仏画は樓閣の中に保存されているのみで、龕に置かれてはいない。したがつて孫権の建立したこの仏塔は樓塔でしかありえず、宮塔ではなかつた。建安二十五年（二二〇年）、孫権はさらに武昌城南に寺を築いたが、主体建築は二つの仏塔であつた。東晋の戴淵はこの仏塔のために「記」を作つたことがある。謝尚は石を立てた。これもやはり樓塔式であつたはずである。

江南と四川で出土した後漢・三国時代の文化財は、南方における仏教寺院樓塔のさまざまな形象を示している。一九八六年、四川什邡泉角郷で漢画像磚が出土したが、画面には仏塔と菩提樹が交互に彫られており、塔の様式は樓塔式であつた（図11）。江寧上坊村で出土した東呉青瓷魂瓶には、四層の樓塔が描かれている。樓の平面は「四方式」を呈し、下から上に層が上がるごとに小さくなっている。樓の頂きは翼を広げた瑞鳥である。各層の四面は扉が開いており、中には坐仏像がある。樓塔の第一層の両側には伝統的な中国式双甌が聳えている（図12）。南京甘家巷高場一号墓から出土した六朝黒瓷魂瓶には、三層の樓塔が描かれている。下層は基座で、壁には坐仏像がある。中層の正面



図11 後漢画像磚の樓塔

には扉が一つ開き、中に坐仏像がある。扉の前には両側に中国式の双厥が聳えている。四面に向かって伸びる盤形の上には八体の仏像が座っている。上層は四面に扉が開き、中に座仏がある。周囲には七体の仏像が座っている(図13)。これもまた明らかに樓塔式仏教寺院の瓷塑のパターンである。扉の中と各層の盤座に坐仏が置かれていたのは、宮塔式「双龕千仏」の名残である。中国式双厥が並び聳えているのもまた、中国建築の伝統を示すものである。

西晋の末期には、高僧道安が襄陽に檀溪寺を築いた。「塔



図12 東呉青瓷魂瓶の樓塔



図13 六朝黒瓷魂瓶の樓塔

を建てること五層、房を起すこと四百、塔内に「尊像を羅列」する、五層の樓塔を中心とする寺院であった。東晋の長沙太守孫放は、「長沙西寺、層構の傾けるを見て、謀りて建立せんとす」。晋の孝武帝は太元九年（三八四年）、建康の長干寺四層塔上の金相輪と承露盤を修理し、その後梁武帝がこの塔を七層に増築した。この二つの晋の寺の主体は、いずれも多層樓塔である。東晋の南朝では仏教寺院を呼ぶのに「塔寺」と言い慣わしていた。盛唐時代に許嵩が著わした「建康実録」には前代の「塔寺記」を引用している。

「塔寺」を書名として六朝の仏教寺院を記述したものである。「塔寺記」にいわく、謝尚の夢に父親が現れ「汝、宜しく福建塔寺を修すべし」と言った。そこで莊嚴寺を建てた。

「塔寺」というのが晋人の仏教寺院に対する通称だったことが分かる。梁の同泰寺は「樓閣大殿は、擬して宸宮に則り、九級浮図は、回りに雲表を張る」ありさまだった。簡文帝蕭綱はその浮図が「宝塔天を飛び、神龜地に湧く」ようであると描写している。おそらくこの樓塔は各層に仏龕が設けられ、魂瓶に描かれている樓塔に似た格好だったのである。「宋書」「南齊書」「梁書」ではいずれも「塔寺」を六朝仏教寺院の総称であるとしているが、ほとんどは樓塔式寺院を指している。

唐・杜牧の「宣州開元寺（東晋時代に建てられた）に題す」という詩にはこう歌われている。

南朝謝朓の城、東吳最も深き処。国を亡ぼし去るごと鴻の如く、遺寺煙塢を蔵す。

樓飛は九十尺、廊環は四百柱。高高として下下の中、鳳は松桂樹を繞る。

春苔朱閣を照らし、白鳥兩ながら相語す、溪声は僧の夢に入り、月色は粉堵を暉かす。

九丈の高樓を主体とし、殿閣僧房を配し、寺の周囲には廊牆をめぐらしているというのである。この詩は樓塔式仏教寺院の完璧な構成を描いている。六朝時代の江南地区によく見られた仏教寺院の様式である。こうした建築物の配置は、柱廊が巡らされた寺院の中に、樓塔、仏殿を主体として、講殿、堂室、僧房等を配するものである。これは樓塔式から廊院式へと移行する過渡期の様式である。中国建築の伝統的な生命力を再び誇示し、廊院殿閣の建築構造様式を示している。天竺の宮塔式をさらに昇華させ、民族的气氛を備えた新たな型の仏教寺院を生み出したのである。

北魏時代の洛京諸寺には、仏像を祭る場所が樓塔から仏殿へと変わる形跡が現れている。洛陽の永寧寺には、二一体のさまざまな仏像が塔後の仏殿に集められている。「洛陽伽藍記」には都の寺五〇か所ほどが記載されているが、永寧、瑤光、胡統、秦上公等いくつかの寺院に塔があるのみで、殿閣が多いが塔のないものが三十余寺に及ぶ。それより以前において宮塔と樓塔の担っていた宗教的機能は、す

でに仏殿へと移っていたのである。事実が物語るように、南北朝末期には、仏塔を寺院の中心とする一元主体時代から次第に、仏殿を中心とし、殿塔楼閣が同じ敷地にある組み合わせ式の多元主体時代へと移っていったのである。仏教寺院の機能も多様化へと向かった。これはまた中国式の木石（磚）の組み合わせが西域の磚石組み合わせと融合した必然的結果でもあった。

## 廊院式仏教寺院

一元主体の宮塔式から、一元主体の楼塔式へ、さらに多元主体の殿塔楼閣組み合わせ式へ。宮塔、楼塔を寺の中心に据える様式から、仏塔が次第に中心の座を明け渡す様式へ。こうした変化は、中国建筑の伝統が天竺様式を融合していく発展過程を示している。困った敷地の中で、若干の単体建築物をさまざまな風格の建物群に組み合わせることは、まさに木組み伝統の全体的配置における優位性である。中古時代の仏教寺院の廊院では、ますます多くの殿、塔、廊、閣、亭、台等が組み合わされるようになり、さまざまな変化の妙を呈している。この発展過程において、中古の廊院式仏教寺院には二種類の基本パターンが形成された。すなわち単院式と多院式である。

### (一) 単院式

単院式は一棟もしくは一組の殿閣を主体として、渡殿もしくは回廊をめぐらしている。単院式の構造は単純であるが、規模は大きいものから小さいものまでさまざまである。例えば北魏の文獻王元懌が建てた洛陽景樂寺は、「仏殿一所」で、「堂廡周環し、曲房連接し、輕条戸を拂い、花藥庭を被いて」おり、實際上皇室の庭園となっていた。梁の相官寺は、仏殿が「高檣三丈」、「峻にして雲端を極め」、「連閣四周」し、「楼は鳳凰かと疑う」ありさまであった。皇太子蕭緯の屋敷として建てられたものである。隋の文帝は都の西南隅に孤独な皇后のために禪定寺を建てた（武徳元年に莊嚴寺と改名）が、「復殿重廊、連甍比棟、幽房秘宇、窈窕として疏通す」。宇文愷は寺に増築を行った。「木浮図を建つるに、崇さ三百三十尺、周回一百二十歩」で、「天下伽藍の盛んなること、比するものなし」。禪定寺の西側には、隋の煬帝が文帝のために大禪定寺を建てた（武徳元年に総持寺と改名）。唐初の高僧法琳は、総持寺の建築構造をこう記述している。

如意の台を起こし、神通の室を列す。仁祠漢を切り、靈利霄を干す。宝樹は八行にして、和鈴は四角なり。龍從たり三層の格（閣）、自響の鐘を懸ける。千葉の蓮を布護し、飛來の座を捧ぐ。

宝樹が蔭を垂らし、蓮池がさざ波をたてる寺院の中で、高台仏殿、方基仏塔、三重樓閣が、主体建築群を形成していた。唐人韋は二つの禪定寺の「寺内様式」は等しいと述べている。すなわち二つとも殿、塔、樓閣群を主体としているというのだ。皇室の建立になるこの二つの寺は、格式の最も高い単院式仏教寺院である。

唐の初期、李世民は旧戦場に七つの寺を建てた。うち汜水の等慈寺は、靈塔、層閣が主体で、僧坊が配され、修廊が巡らされている。庭園、蓮池が築かれ、静寂な雰囲気を醸し出しており、庭園式の寺である。龍朔時は、言い伝えによれば普光王の化身である西域の僧であるが、臨淮に普光王寺を建てた。「繚垣は雲のごとく轟え、正殿は霞のごとく開く。層樓は其の三門を傲ぎ、飛閣は其の両舗に通ず。舍利の塔、七宝山に齊しく、浄土の堂、三光景を奪う」中古の名寺である。神龍二年（七〇六年）、嵩山に永泰公主のために永泰寺が建てられた。「檐宇四方にめぐり、回廊復た周す」、小型の功德寺であった。これら三つの寺はいずれも中規模に属する単院式仏教寺院である。

北齊の初年、僧宝公の見た林慮の白鹿山靈隱寺は、「屋宇四周し、門房並びて閉づ。講堂に入れば、唯だ床榻と高座を見るのみ」の簡素な山寺であった。武徳五年（六二二年）、汾州介休県に光嚴寺が建てられた。「殿宇房樓」は「宏壯」ではあるものの、その実規模は決して大きくない。唐の初

期、長安の弘化寺は、「唯一の仏堂、僧衆の創め停まるも、仄陋にして已む」というありさまで、きわめて粗末な単院式の小寺であった。

## (二) 多院式

多院式の仏教寺院は、主院と傍院に分かれる。主院はほとんどが殿閣群を主体とするが、傍院にも主殿ないし樓閣がある。主院と傍院は互いにつながり、一つの大きな寺を構成している。主院と傍院が隣り合っているがつかっていないものもある。傍院自体で横聯多院式を構成している場合もある。

多院式の出現は早く、格式もさまざまだが、いずれも大寺である。南燕の帝慕容徳（在位三九八—四〇四年）は、泰山の僧朗が朗公寺を建ててのを援助した。「上下諸院、十有余所、長廊連表、千有余間」。前後（上下）十余院が、長廊で互いにつながっている縦聯多院式仏教寺院であった。齊の高帝（在位四七九—四八二年）は、蕪州北鼓吹山上に、地形をうまく利用して福田寺を建てた。「三院相接し」、次第に丈が高くなり、「最頂別院は名を『禪居』と曰ふ」、縦聯三院式の仏教寺院であった。梁の武帝（在位五〇二—五四九年）は、鐘山北澗に亡父のために大愛敬寺を建てた。「中院正殿に、梅檀像有り、挙げて高さ丈八」、「中院の大門、延袤七里、廊廡相架し、檐雷臨属す。傍に三十六院を



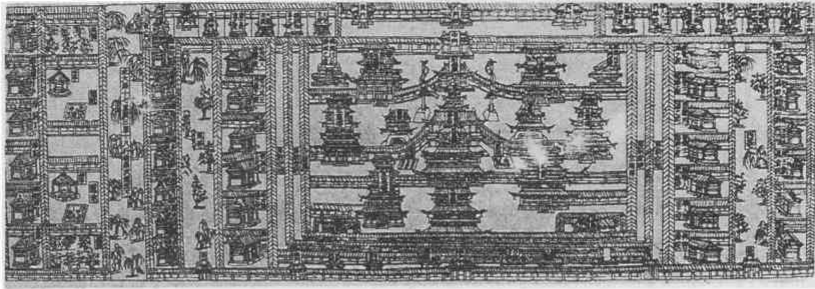


図14 戒壇図経

置き、皆池台を設け、周宇は環繞たり、「経宮彫麗にして、奄たること天宮の若し」。内裏式のこの皇室の祭寺は、中院を主とし、傍に三六院を置く。横連多院式である。

多院式は唐代に至って大いに盛んになった。道宣は隋の寺を「失度」として斥け、「末法造寺」となし、天竺の「祇洹(舎衛城祇洹精舎) 図様」に従って様式とするよう主張し、「戒壇図経」で寺の標準タイプを示した(図14)。この図は横連四院式の仏教寺院を現している。

中央が主院で、三条の横廊で中院を縦聯四院式に区切っている。中院を通る中軸線の上に、順番に前仏殿、七重塔、後

仏殿、三重楼、三重閣が建てられ、主体群を形成している。三条の横廊と中院後廊には、順番に左右の三重楼、左右の五重楼をつくり、左右の五重楼と東西の仏庫は、いずれも対称を成して立っている。中院の左側には横聯二院が、右側には横聯一院がある。三傍院には廊牆で隔てられた小院が五十余あり、それぞれの小院の中央には一つずつ殿(もしくは亭)が建っている。

『戒壇図経』に示された多院式配置は現実を反映するものである。史書に記載されている都の大寺の姿を復元する手掛かりになる。例えば隋の文帝の建てた遵善寺(唐名鄴国寺、大興善寺)は、廊院の外にまた廊院があり、「寺院は崇広にして、京師の最たり」。唐の貞観時代に建てられた大慈恩寺は、「凡そ十余院、総じて一千八百九十七間」であった。顕慶の初期に、唐高宗が西明寺を建てたが、「寺面三百五十歩、教里を周り囲む」、「廊、殿、楼、台は飛瓊の漢に接し、金鋪藻棟にして、目を眩ませ霞を暉かす。凡そ十院有り、屋は四千余間。莊嚴の盛んなること、梁の同泰、魏の永寧も及ぶ能わざる所なり」。至徳の初期、唐の玄宗が成都に大聖慈寺を建てたが、「凡そ九十六院、八千五百区」であった。唐の代宗は大歴初年に、「長安の東門に章敬寺を作る。総じて四千一所三十余間、四十八院」であった。こうした多院式の大寺は、あたかもそれぞれが「仏城」のようであった。その配置格式は、『戒壇図経』から窺い知れる。

『広清涼伝』の中の僧道義の物語は、道義が五台山中台⑩において金閣寺の幻影を見たさまをこう述べている。「中院の三門（山門）の楼閣は金色に輝いて目を奪うばかり、大閣は三層上下九間、大食堂前には僧侶が盈ち、堂殿廊廡が皆金で飾られている。東廊六院、西廊六院、それぞれ院名を有す」。大歴の初め、唐の代宗が道義の「見た」ものに従って金閣寺を建造するよう命じた。この寺の配置は縦列三院式で、中院の山門は楼閣式、中院の主体は三層仏閣である。後ろには大食堂がある。中院と両廊でつながる東院、西院は、またそれぞれ横聯六院となっている。唐の玄宗の開成五年（八四〇年）に、日本の求法僧円仁が五台山に至り、山のほとりの竹林寺に六院があるのを見た。律院、庫院、花岩院、法花院、閣院、仏殿院である。その配置は仏殿院、閣院が前後縦列をなして中院を形づくり、ほかの四院は二つずつ縦列して東院と西院になり、全体で横連六院となっていたと思われる。五台山のこの二つの寺院もまた、『戒壇図経』と同一の様式である。

唐代に州や県に建てられた寺の規模は、一般に都の名だたる大寺より小さいが、その様式はやはり殿堂、楼閣群を主体とする単院式ないし多院式に属する。叔孫矩の『大唐揚州六合県靈居寺碑』は、元和年間の靈居寺の配置を次のように記述している。

高殿は岩岩として、三尊を列し儼若たり、端門は突突

として、双駕を容れて豁然たり。……門より入りて右にいけば、浄土坊を開き、華台芬として、葉座を敷き、九品聖を揖し、無量尊に礼す。……門より入りて左にいけば、僧伽院を辟ぎ、顔黎地より、窣堵波の湧く。……大殿の後ろにて、厥ち講堂を構へ、森は柱を浮かべて星を以て懸け、雄なる梁に抗して虹は翳び、層は雲勃を覆い、檐を重ねて翼を張る。……講堂の後ろには、天厨を建つる。厨の西には賓客省が序列し、厨の東には陳香積庫が序列す。厨の西北に穀物庫あり。厨の東北に奴婢院あり。浄土坊の後ろには、律堂を創る。下は放生池を圧して、生きながらに水族を観る。上は異業の閣に臨みて、時に風鏞を聞く。

碑文からつぶさにこの寺の配置を推察すると、やはり横聯三院式である。中院に入る経路は三つある。端門から仏殿に入るのが一つで、端門の幅は車二台が並んで通れるほどである。正殿の中には三体の仏像が祭られている。二つ目は仏殿の後ろから講堂に至る経路で、講堂は檐が重なり雄大である。講堂の後ろから天厨に至るのが三つ目の経路である。天厨院の前には、香積院、賓客省が東西対称に立っている。天厨の後ろの両側には穀物庫、奴婢院がこれも対称に立っている。西院は入り口が二つあり、前は浄土坊で、無量寿仏を祭っている。後ろは律堂で、放生池がある。東院は僧伽院で、中に窣堵波がある。中院の三つの入り口は

横廊で区切られてはいない。天厨の前後にはいずれも対称になつてゐる建物がある。後世で盛んになる寺院の配置——中軸式対称構造が、この時すでに形成されていたのである。

穆宗の長慶五年（八二五年）から文宗の太和元年（八二七年）にかけて、徐州節度使王智興と三州僧正釈明遠が、泗州に開元寺を再建した。「殿、閣、堂、亭、廊庑、廡藏より、僧徒、奴婢、傭保、馬牛の舎に至るまで、凡そ二千若干百十間」、「壯麗・莊嚴にして、ぎっしりと建ち並び、あたかも地から躍り出、天から降つたかのよう」であつた。

『戒壇図経』と六合具靈居寺の構造を対照すると、この寺もやはり多院式であつたことが推察できる。中院の中軸上の建築群には、仏殿、重閣、講堂があり、おそらく天厨もあつたであろう。天厨の後ろには、倉と庫が対称になつていた。中院のまわりには、僧伽院、奴婢院、傭保舎、牛馬小屋等が「ぎっしりと並んでいた」というのである。

宣宗の大中年（八五一年）、青原山行思道場——安隱寺（後に淨居寺と改名）が再建された。「山寺の規制は、寺門を入ると九楹あり、両廊二十四楹、池中に大雄殿あり、三橋これを拱む。後ろは毘盧閣たり、……さらに後ろは七祖帰真塔たり」。この寺は大雄殿を主殿とし、殿の後ろには並列のアーチ橋三基で区切られた毘盧遮那閣がある。寺門九楹（南廊牆を含まず）、東西廊牆各十二楹、寺全体の平面構成は正方形に近い。崔黯の『東林寺碑（大中年二月）』に、

当時東林寺を再建した状況が述べられている。

殿の若し廂の若し、闕の左右を塔となすが若し。講ずるが若し食するが若し、客の館たるが若し。庫たるが若し樓たるが若し、厨の飛泉を激して鬲鈔の間に注ぐが若し。僧の房たるが若し、聖の室たるが若し。……則ち間の三百一十三たり、架の一千八百七十六たり。

これらの文字が表している寺院の配置はあましまし次のようなものである。闕式双塔が三門の両側に立っている。院の中には、正殿の両廂に配殿がある。さらに客館、庫藏、天厨、樓閣、僧房等がある。おそらくは前後縦列の多院式仏教寺院だったのであろう。

### (三) 禅院

中国における仏教寺院の發展過程で、禅寺はまた独自の道を歩み、独特の風格を有している。中古の時代に、禅僧が禅の修行をする際、北方では毘訶羅窟室で行い、南方では山林に庵を結ぶことが多かつた。唐代に禅宗が形成されると、禅僧はまず律寺に別院を設けて禅の修行をした。南宗は「叢林」を開き、禅居を独立させ、さらに廊院式禅宗寺院へと發展させた。唐の徳宗の時、懐海が洪州新呉に百丈山叢林を創立し、『禪門規式』を編んで、禅寺の發展の道程を叙述した。

曹溪(すなわち六祖慧能)以来、多くは律寺に居す。別院なれど、説法住持は、未だ規度に合せず。……ここに禅居を別に立つることを創意す。凡そ道眼を具し尊ぶべきの徳有る者を、「長老」と号し、……即ち「方丈」に処す。浄名の室と同じくして、私寝の室に非ず。仏殿を立てず、唯だ「法堂」を樹てるのみ、仏祖を表して親しく囑授し、当代を尊と為す也。褒めるところの学衆は、多少なく、高下なく、尽く「僧堂」の中に入りて、夏次に依りて安排す。(僧堂には)長連床を設け、櫛架を施し、椽、道具を掛く。

懐海<sup>(12)</sup>の創立した「禅居」は、方丈、法堂、僧堂のみを設け、仏殿を立てず、仏像も置かなかつた。方丈は長老住持の浄室であり、法堂は仏祖を象徴し、僧堂は僧衆の居室である。

唐の後期には、禅宗が盛んになり、禅林も経済的に豊かになって、簡素な禅居が次第に大きくなり、禅院へと変わっていった。太和五年(八三一年)、僧寂然が剡県沃州山の南に禅院を建てた。「正殿若干間、齋堂若干間、僧舎若干間」で、法堂が正殿に拡張され、齋堂が新設されており、おそらくは院扉も築かれ、その規模はすでに禅居の比ではなかつた。唐の昭宗の天復三年(九〇六年)、福州永泰県に北山禅寺が落成した。

方丈、法堂、禅房、客厅、香積、餐室を計<sup>か</sup>えるに、

その数百数十楹は下らず、寺僧百余衆、全永の一大叢林也。

禅院の主要建築と規模は、唐末からあらしその形を整えた。永泰北山寺に初めて現れた客堂、香積庫等は、近代の禅院にもなお存在する。近代禅院の基本的構造は唐末にすでに形が定まったといえる。

#### (四) 壁画が示す寺の姿

敦煌石窟の壁画に描かれた寺院聖殿の一つ一つが、人の世の建築(寺院を含む)の芸術的再現である。建築物が描かれている壁画は、基本的には隋、唐、宋三代の作品である。その中の仏教寺院の画面は、当時の寺院建築の全体的配置と個々の建物の特徴を生き生きと映し出している。特に廊院式寺院の特徴がよく現れている。蕭默氏の著になる『敦煌建築研究』<sup>(13)</sup>では、「仏寺」という章を設け、専門的な検討を行っている。

蕭默氏は次のように書いている。敦煌壁画に描かれた唐代廊院寺を見ると、主体建築の「最も普遍的な形式は、正中一座の五間大殿、单檐歇山もしくは廡殿頂で、大殿の左右にはそれぞれ一つずつ三層ないし四層の楼閣が立っている」。「戒壇図経」に描かれている中院中門の中には前仏殿があり、左右にそれぞれ三層楼があつて、「ちようど隋代壁画と符合する」。盛唐から宋初にかけての壁画に描かれた寺

院は、「その組み合わせによってさらに三つのタイプに分けることができる。すなわち単院、前後縦列の二院及び左右横聯の三院である」。第六一窟西壁『五台山図・大清凉之寺』は単院式の典型である。敷地は回廊が方形に囲み、敷地正面の中央には、二層の門楼が設けられ、敷地の四隅には二層の角楼がある。敷地の中に二層の閣が二つ、三層の塔が一つある(図15)。「五台山図」の中に描かれている小さな寺の真ん中には、六角塔が一つある(図16)。「万菩薩樓」の中央は四層の樓閣である(図17)。この三つの寺はなお塔楼様式の面影を残し、樓塔を中心とする早期仏教寺院の配置が、唐宋時代にはまだ見られたことを示している。

盛唐第一七二窟北壁に描かれた単院式仏教寺院は、方形の大院で、敷地の後部には中軸に沿って三つの大殿が設けられている。前殿は単層の廡殿頂、中殿は二層の樓閣、後殿はまた単層である。中唐第三六一窟北壁に描かれている単院式仏教寺院は、六角の二層塔一基を中心に、左右の配殿はいずれも二層三間歇山樓閣である。前角楼は六角亭、後角楼は円形の小亭である。山門は二層の樓閣になっていて、間廡殿頂が三つ開かれている。

蕭默氏の指摘によれば、敦煌壁画に見られる前後縦列の双院式配置は、上記の単院の後ろにさらに後院をつなげたものに相当する。例えば晚唐第八五窟に描かれている寺院(図18)では、横廊が寺全体を二つの院に区切っており、後

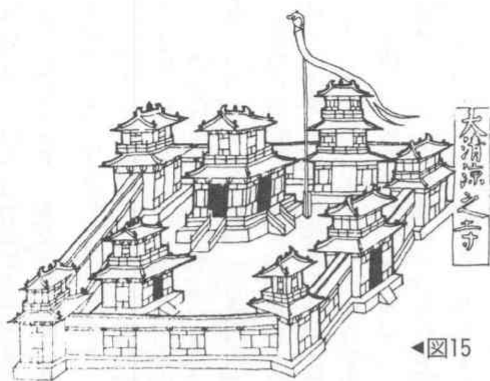
院の中央は並列の二層樓閣三基で、樓閣の上層は釣橋でつながっている。後院の左右にはそれぞれ、六角形の二層樓閣が建てられている。

敦煌壁画に見られる横列三院式には二つの様式がある。

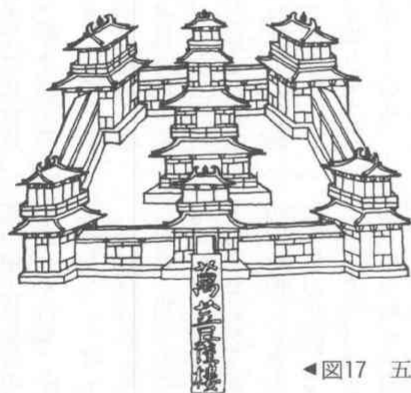
一つは三院が互いにつながらず、それぞれ独立して単院となっているもの。三院の中では中院が最も大きく、建築は南向きである。東西の二院はやや小さく、それぞれが中院の方を向いており、中院と相互に扉が開くか、または傍院のみに扉が開いていて、行き来できるようにになっている。

こうした様式は中唐第二三一窟(図19)、晚唐第八五窟(図20)にそれぞれ描かれている。もう一つの様式は、三院がつながっているもので、中院が最も大きく、左右の二院は南北の幅が中院の奥行きより小さい。中院の仏殿はちょうど凹形の空間に置かれ、南北端に角楼が設けられている。三院はすべて回廊で囲まれている。この様式は盛唐第一四八窟(図21)の壁画に見られる。

敦煌壁画に描かれた多院式構造は、縦聯、横聯のいずれとも、全体的配置の上で、対称構造に対する強い希求を示している。唐初の『戒壇図経』に隠然と現れた対称傾向と比べると、晚唐五代の廊院の対称配置はすでに成熟を示し、寺院の全体的配置における濃厚な民族的風格が、ここで形を定めている。晚唐五代の多彩な廊院式配置、及びさまざまな殿閣樓塔の造形は、中古の時代に、伝統的な木石(磚)



◀ 图15 五台山图·大清涼之寺



◀ 图17 五台山图·万菩薩樓



▲ 图16 五台山图·六角塔

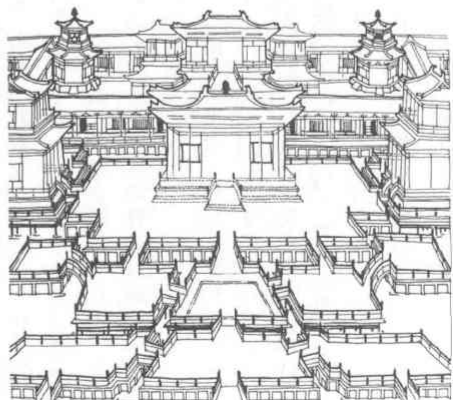


图18 縱列双院式寺院 ▶

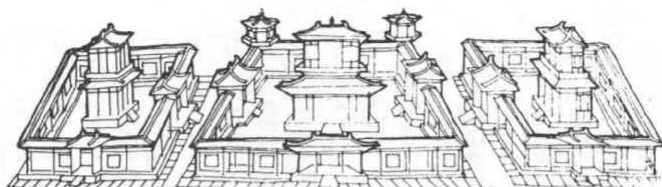


図19 横列三院式寺院(1)

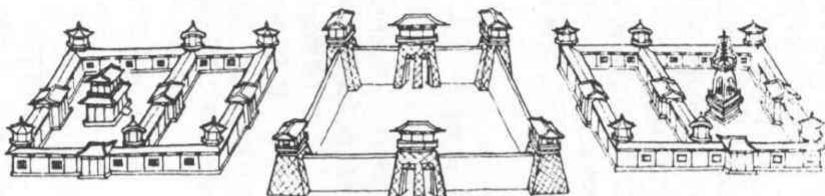


図20 横列三院式寺院(2)



図21 横列三院式寺院(3)

構造が建築の組み合わせや個々の造形において秀れていたことから、中国様式とインド様式の融合、インド様式の中国化という歴史的变化を推進し、多様性に富み独特の風格を備えた中国の仏教寺院群を作り出したことをあざやかに物語っている。

原注

(1)『高僧伝』巻九「仏図澄伝」に王度の奏上が引用されている。「往、漢明(帝)夢に感じ、初めて其の道を伝えるに、惟だ西域の人にのみ都邑に寺を立て、以て其の神を奉ずるを得さしむ。其の漢人皆出家するを得ず。魏は漢制を承け、亦た前規に循う。『大正大藏経』(以下、『大正藏』と略称)巻五〇、三八五頁参照。『晋書・仏図澄伝』にも同様の記載あり。

(2)『菩提樹垣』玄奘・辯機撰・季羨林等『大唐西域記校注』巻八、中華書局、一九八五年二月、六六八頁。「菩提樹伽藍」、同書、三〇八頁。

(3)『鹿野伽藍』、同書、巻七、五六一頁。

(4)向達訳『斯坦因西域考古記』中華書局、

民国三十五年八月再版、第七章、第五一図。

〔5〕七フィートは二・一七mに相当。

〔6〕「法顯伝」『大正藏』卷五一、八五七頁参照。

〔7〕『晋書』卷九七「四夷伝・龜茲国」。

〔8〕黃文弼「新疆考古的新発見」『考古』一九五九年第二期。寺塔については図版六参照。

〔9〕国家文物局文物保護研究所炭素14実験室「炭素14年代測定報告(一)」『文物』一九八〇年第二期参照。

〔10〕前掲「斯坦因西域考古記」第七章、第一一九図。

〔11〕「釈迦方志」卷上、『大正藏』卷五一、九五二頁参照。

〔12〕前掲「斯坦因西域考古記」第四章、第二八図。

〔13〕前掲「炭素14年代測定報告(一)」によれば、丹丹頭出土木炭年代は一二二〇年(±八〇年)前と測定された。すなわち西暦七六〇年前後である。年輪校正によれば一一五五年前(±八五年)、すなわち西暦八二五年前後である。『文物』一九八〇年第二期。

〔14〕『後漢書』卷七三「陶謙伝」。中華書局校点本、二三六八頁。以下、二十四史は同じ版本により、頁数のみを表記する。

〔15〕『三国志』卷四九「劉繇伝」、一一八五頁。

〔16〕「法苑珠林」卷四〇に引く「漢法本内伝」。

〔17〕『三国志』「劉繇伝」に笮融が「大いに仏塔祠を起て、銅を以て人と爲し、黄金を身に塗り、衣は錦を以て採る」とある。仏身が錦をまといつていたことから、仏像は塔内に置かれていたことが分かる。

〔18〕『金石萃編』卷六九「涼州衛大雲寺碑」(唐景雲二年)。

〔19〕『魏書』卷一四「釈老志」、三〇三六頁。「興光元年(四五四年)秋、有司にむけて、五級大寺内に、太祖以下

帝のために釈迦立像五体を鑄すべしと勅す。」

〔20〕『魏書』卷一四「釈老志」、三〇三七頁。

〔21〕楊勇「洛陽伽藍記校箋」卷一。中国社会科学院考古研究所洛陽工作队「北魏永寧寺塔基發掘簡報」『考古』一九八一年第三期。塔の高さは楊鴻勳氏の推測による。

〔22〕『魏書』卷七五「爾朱兆伝」、一六六二頁参照。

〔23〕『統高僧伝』卷二九「道積伝」。

〔24〕『高僧伝』卷一「康僧会伝」。

〔25〕潘天寿「中国絵画史」第二章に引く「広画新集」。

〔26〕『武昌県志』に引く「熊志」。鄂州市博物館熊亞雲、熊寿昌の未刊本による。

〔27〕この魂瓶は現在南京市博物館所蔵。図版は同博物館編「中国南方早期仏教芸術展」(図冊)参照。

〔28〕唐長寿「四川早期仏教遺物辨識」『東南文化』一九九一年第五期参照。

〔29〕金琦「南京甘家巷・董家山六朝墓」『考古』一九六三年第六期、魂瓶は同期図版三参照。

〔30〕『高僧伝』卷五「道安伝」。

〔31〕『初学記』卷二「孫放「西寺銘序」、『全晋文』卷六四参照。

〔32〕許嵩「建康実録」卷一七「高祖武皇帝」に引く「寺記」。

〔33〕『建康実録』卷八「孝宗穆皇帝・謝尚伝」。

〔34〕『統高僧伝』卷一「宝唱伝」。



- (35) 『全梁文』卷一〇、梁簡文帝「答同泰寺立刹啓」。
- (36) 『宋書』卷九七「夷蛮伝」に引く蕭攀の奏上「形象塔寺、所在千數」(二三八六頁)。「南齊書」卷三「武帝紀」に引く「今公私皆な……塔寺を起立するを得ず」。同卷五一「張欣泰伝」に引く「塔寺を毀ち廢すを宜しとす」(六一、八八二頁)。「梁書」卷五四「諸夷伝」に引く婆利国使の表「伏して聖王を承け……塔寺を興立す」(七九六頁)。
- (37) 『全唐詩』卷五二。
- (38) 『洛陽伽藍記校箋』卷一。
- (39) 『全梁文』卷一四、梁簡文帝「相(湘)宮寺碑」。
- (40) 『宋高僧伝』卷一六「慧靈伝」。
- (41) 韋述「兩京新記」卷一〇「和平坊」。
- (42) 法琳「辨正論」卷三「十代奉仏」、「大正藏」卷五二、五〇九頁参照。
- (43) 『金石萃編』卷四二「等慈寺塔記銘」。
- (44) 李邕「大唐泗州臨淮郡普光王寺碑」『全唐文』卷二六三参照。
- (45) 『金石萃編』卷八九「中岳永泰寺碑」。
- (47) 侯君素「旌異記」、「太平広記」卷九九「靈隱寺」参照。
- (47) 『統高僧伝』卷二〇「志超伝」。
- (48) 『統高僧伝』卷二〇「静琳伝」。
- (49) 『統高僧伝』卷一〇「法瓊伝」。
- (50) 『統高僧伝』卷一一「明舜伝」。
- (51) 『統高僧伝』卷一「宝唱伝」。
- (52) 道宣「四分律」刪繁補厥行事抄」卷下三「僧像致敬

篇」、「大正藏」卷四〇参照。

(53) 道宣「閩中創立戒壇図経」、「大藏経」卷四五参照。

(54) 段成式「酉陽雜俎」続集卷五「一塔記上」。

(55) 『兩京新記』卷八「進昌坊」。

(56) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷一〇。

(57) 『仏祖統記』卷四〇「法運通塞七」。

(58) 『長安志』卷一〇「郭外」。

(59) 『広清涼伝』卷中「道義和尚入化金閣寺」、「大正藏」卷五二、一一一三頁参照。

(60) 『入唐求法巡礼行記』卷二「開成五年五月一日」。

(61) 『全唐文』卷七四五。

(62) 『白氏長慶集』卷六〇「大唐泗州開元寺臨壇律德徐泗濠三州僧正明遠大師塔碑銘併序」(太和八年)。

(63) 清・定祥修、劉澤纂「吉安府志」卷八「建置志・四観」。

(64) 『全唐文』卷七五七。

(65) 『景德伝灯録』卷六「百丈懷海伝」、「大正藏」卷五一、二四九頁参照。

(66) 白居易「沃州山禪院記」、「全唐文」卷六七六参照。

(67) 董秉清等修、王紹沂纂「永泰県志」卷三「名勝・寺観」、民国十一年(一九二二年)鉛印本。

(68) 蕭黙「敦煌建築研究」文物出版社、一九八九年。以下、同書を引用する際は注釈を省略。

### 補注

(1) 玄奘(六〇二—六六四)…通称三藏法師、俗称唐僧。唐

の仏教学者、旅行家。唯識宗の創始者の一人。唐の貞観三年、天竺（インド）に赴き、一七年を経て長安に帰る。旅行見聞を記し、『大唐西域記』を編集。

(2) 法顯(三三七?—四四二?)…東晋の僧、旅行家、翻訳家、訳経家。東晋の隆安二年(三九九)に西方に法を求め、天竺を遍歴すること、前後一四年にわたった。旅の見聞をまとめ、『佛国記』(法顯伝)とも称す)を編集。

(3) スタイン(一八六二—一九四三)…イギリスの考古学者、チエコスロバキア生まれ。三度にわたって中国の新疆ウイグル自治区、甘肅省の奥深くに分け入り、敦煌の石窟から千余年のあいだ珍藏されていた写経、絵画などを持ち帰る。著書に『古代ホータン』などがある。

(4) 浮屠…①サンスクリット Buddha の音訳。浮図とも訳す。仏陀のこと。②サンスクリット Buddhastupa の音訳、仏塔を指す。

(5) 永寧寺：現在の洛陽に遺跡がある。北魏の熙平元年(五一六)に胡太后が宮殿側に建築した。浮屠(塔)が九層に及び、僧房は千間、華麗を極めた。

(6) 康僧会(?—二八〇)…三国時代の呉の僧。天竺に暮らし、後に交趾(今のベトナム)に移住、一〇歳過ぎに出家し、呉の赤烏一〇年(二四七)から建業(今の南京)に移る。孫建は彼のためにここに塔を建てた。江南における初めての仏教寺院である。

(7) 道安(三一四—三八五)…東晋、前秦の僧。般若学六大家の一人。漢代以来流行した禅法・般若の二系統の学説を

総括して、戒律を確立し、僧侶が「釈」を姓とすべきだと主張し、後世の範となった。

(8) 宇文愷(五五一—六一二)…隋代の建築家、隋の文帝の時、営新都副監に任ぜられ、大西城(現在の西安)を築く。隋の煬帝が東都を建てると、営東副監に任ぜられ、工部尚書を拝命する。彼の設計になる東都の建築には佛寺が多い。

(9) 道宣(五九六—六六七)…唐僧、律宗の創始者。その思想は玄奘の影響を受ける。終南山に戒壇を創立し、戒律を伝授した。

(10) 五台山…山西省東北部にあり、山頂には佛寺が多い。主なものは南禅寺、佛光寺、顯通寺など。普陀山、九華山、峨眉山と並んで中国仏教四大名山と称さる。

(11) 窣堵波…ストウパ。「塔」のサンスクリット音訳。

(12) 懷海(七二〇—八一四)…唐代の禅宗僧。もともと禅僧は律寺に住むことが多かったが、彼は禅宗と律宗の習慣の相違を理由に、禅院を創設し、『禪門規式』(後に『百丈清規』と称される)を制定した。

(補注 馮天瑜／邦訳 馬場節子)